みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

虹のメタファーに見る華商ネットワークの本質

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5253

虹のメタファーに見る
華商ネットワークの本質

陳 天 璽

I. はじめに——アジア経済における華人ネットワーク論

華僑・華人に関する研究において、彼らはしばしば、ネットワークを有しているとイメージされている。特に、1970年代頃からのアジア経済の急速な成長の原因解明を行った研究などにおいて、華商は注目を浴びた。彼らはエスニックな繋がりによって形成されているネットワーク(1)を活用し、情報や資本の流通を迅速に行っているといわれ、華商の多くが居住しているアジアは、その助けもあり、急速に経済成長したのであると分析された(2)。また、そうした見方は、アジア各国に散在している華商は、成長著しい中国の経済と一体になって、「大中華経済圏」を形成し、世界的な影響力を持つアクターになるであろうと考えられ、「中国脅威論」にまで発展した。

しかし、1997年のアジア金融危機の発生は、世界に大きな衝撃を与え、これにより、それまで「アジア経済発展の旗手」(3)として高く評価されていた華商経済は一気にその勢いを失った。特にインドネシアでは経済危機と政変による鬱憤が「排華運動（華人排斥運動）」に繋がり、インドネシア華人は、経済どころか生命的な危機にも直面した。華商経済に対する世論の評価もネガティブな論調が増え、アジアの成長を支えてきた華商ネットワークは、アジアの不透明・不健全な市場システムの典型的表現の一つであると批判されるようになった。

さて、ここで注意しなければならないのは、華商ネットワークは、観察者によって、あたかも確固たるものとして存在しているかのように語られており、中国系の人々が言語的、文化的同質性をもとに国を越えて繋がりを持ち、排他的なネットワークを構築しているというイメージが形成されていることである。

しかし、果たして華商ネットワークは確固たるものとして存在するのであろうか。もし存在するなら、それはイメージされているような排他的な性質を持つエスニックな繋がりなのであろうか。これまでの先行研究では、華商ネットワークが実在するということを前提としており、その存在の有無について問われることは極めて少なかった。しかも、華商ネットワークというものは、彼らによって意識的に作られ、そして実質的なシステムを形成しているというよりは、むしろ移民である彼らに密着した生きる知恵なの

ではないか。華僑・華人が有する、家族主義、「信用（xinyong）」、「関係（guanxi）」、礼、仁などのさまざまな価値観は彼らの行動規範であり、そのような彼らの生活様式が外部の者によって華商ネットワークと見られたものと考えられる。

したがって、筆者は、華商が有しているとイメージされている排他性を持ったネットワークは、元来、華商によって意図的に作られたのではない、という仮説を立ててみたい。そうしたネットワークはむしろ、自然発生的なものであり、しかも、観察者の視座によって様相を変えるというダイナミズムを持ったものであると考えられる。移民としての背景を持っている華商が、彼らの持つ世界観や倫理精神、そして経済合理性を基に相互扶助を行っていたことが、意図せざる結果として、観察者によって、華商ネットワークと捉えられたものと考えることができる。こうして観察者によって、ネットワークの有効性が認識されたため、近年になり、華商の間でネットワークを意識的に形成しようとする動きが見られるようになった。

II. 華商のアイデンティティの可変性

ディアスポラ(4)の一員である華商は複数の国家や社会、文化との関わりを持つ独特な立場を有し、彼らを取り巻く「世界」は興味深い特徴を持っている。これまで、観察者は主に「中華」を「世界」とし、その内側に拡がる「世界」を分析することによって、華僑・華人社会における三縁関係（地縁・血縁・業縁）などの特徴を見出し、そうした自然発生的な相互扶助関係を「華人ネットワーク」とした。これは、華僑・華人をめぐる、いわば狭義の＝内向きの世界観（41ページ、図2）を基にした見方である。しかし、華僑・華人は世界各地に散在しており、国家を跨いで活動する彼らにとって、グローバル社会こそが「世界」であり、広義の＝外向きの世界観（41ページ、図3）を用いて彼らを分析することによって、はじめて、問題の本質に迫ることができると考える。

本論は以上のような仮説を立て、これを実証することを主な目的とする。この目的を達成するためには、まず、華商ネットワークの実体をあらゆる角度から把握し、それを形成する主体である華商個々人の行動原理やアイデンティティを理解することが重要であると考える。そのため、筆者は、華商ネットワークが注目を浴びるなかで、ネットワークの理論をはじめ、関連した先行研究のなかに華商ネットワークを浮かび上がらせるモデルを模索したが、そうしたものを見出すことはできなかった。むしろ、そのプロセスのなかで筆者は、華商のネットワークとアイデンティティが虹という自然現象と類似していることを発見した。ここに提示する虹のメタファーによって、華商のネットワークとアイデンティティの実体を描き出すことが可能であり、しかも理解を深めることができる。それに加えて、本論の仮説である、華商ネットワークの形成の無意識性をも説明することができるのである。

華商ネットワークは本来、華商が意図的に作ったものではなく、虹が自然現象であるのと同様に、移民した華商たちにとって、それはごく自然な生活習慣であり、あるいは当然持っている社会的な繋がりであった。むしろ、華商を観察する者の視点によって人的な繋がりの存在が表出され、ネットワークとして認識されるようになったのである。それはちょうど、虹が水滴の濃淡と光線の角度によって形成され、それを見る場所によって見えたり見えなかったりするのと似ている。空に架かった虹を正面で見た場合は目に映るが、虹の真下に入ったり、側面に立った場合は見えなくなる。虹が見えないからといって、それはどこにも存在していない訳ではなく、他の場所においては存在していたり、他の場所から見れば存在している。同様に、華商ネットワークもそれを見る視点によって見え隠れし、観察者がその存在を認識していない場合にも、どこかでネットワークが機能していることがある。しかも、華商ネットワークといった場合、それは単一で固定したものを想定しがちであるが、実際は複数存在しており、しかも可変的なものである。一個のネットワークが消滅しても、他のネットワークが別に機能していることもあり得るのである。また、そのネットワークが消滅したとしても、再び出現することもある。こうした現象も虹のあり方に類似しているであろう。

また、華商ネットワークは広汎な繋がりを有する強大なもののように見られているが、実は個人的な繋がりを基本としており、華商一人ひとりが所有する独自の人的関係が連鎖的に結合し、それが機能を果たし、注目を浴びた際に華商ネットワークとして認識される。さらに、それは個人を基本としているため、個人個人に起こる変化は全体を大きく左右する。つまり、個人が置かれている環境や時期に応じて変容するアイデンティティによって、ネットワークもさまざまな形で形成、再編されるのである。したがって、華商ネットワークが存在すると認識するのであれば、それはこれまでにイメージされているような強大かつ広汎で、しかも固定的なものではなく、むしろ、極めて個人的で、しかも曖昧かつ可変的なものなのである。

変容自在であるのは、華商が、海外に移り住んだ移民として複数の文化的背景を内包する個人であるがゆえに特殊なアイデンティティを持っており、またビジネスを行う者として経済合理性を追求する性質を持ったアクターであるがゆえに比較的柔軟な思考を持っているからである。

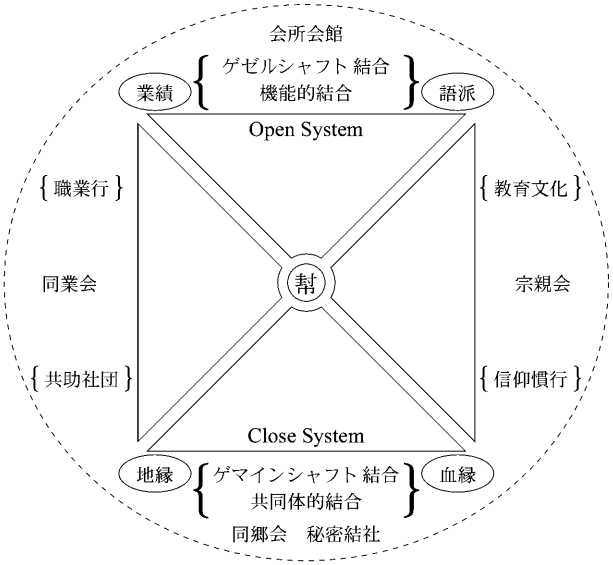
華商ネットワークは可変性を持ったものであり、外界（観察者など）との相互作用によりさまざまに姿を変えるような、ダイナミズムを持った「生命体」である。それは、自然現象である虹の性質と類似しており、華商のネットワークとアイデンティティのあり方と特徴は、虹の喩えを借りることによって、より明確に表出することができると筆者は考える。

III. 華商ネットワーク論の起源とその世界

1. 幇を中心とした社会

華商ネットワークに対する視点が形成されたのは、華僑社会成立当初の「幇（bang、ギルド）」にその発端があると考えられる。市川信愛[5]は華僑社会の核心に幇を置き（図1）、そして、それが華僑の排出、吸引の要諦を果たしたか否かについての分析を行い、それが時代や環境に応じて変化したことを明らかにした。陳荊和も東南アジアの幇問題の研究を行っているが、陳は「東南アジアの経済社会の動向を見極めようとする場合、華僑の存在、役割、地位を無視することはできない。彼らの強固な結合とネットワークは、他の諸民族には見られない特質といってよい。その中核的地位と役割を担うものは依然として、幇にあるといわなければならない」[6]と強調している。そして、楊建成[7]も華僑型集団社会の原型に幇を挙げて分析しており、福建、広東、潮州、客家、海南、広西、三江（上海、河北など）、北（東北）など地域・方言別に幇を分け、その活動や性格の特徴を分析している。呉主恵[8]は社会としてみる華僑を幇と表現し、「幇としての華僑の理解は、その本質的把握のための重要な視点である」と主張する。また呉は「華僑幇とは中国南方人型的性格をもつ郷土関係の経済ギルドの事である」とし、「つまり、血縁及び地縁を以て組織的に結合された一種の経済的包括体なのである」と述べている。具体的に

図1　幇を中心とした華僑華人社会



（凡例）＝強い結合，－相互補完的結合，…包括的結合
同業会＞会館＞同郷会＝宗親会のヒエラルキー
（出所）市川信愛『華僑社会経済論序説』，九州大学出版会，1987年.

いえば、幇は会館や公所という同業組合として相互扶助、共同利益の増進を図ってきた。幇のこのような理念は、否定できない人的紐帯の源流を作っているものとして理解せねばならないことを、呉は強調している。

以上に見た先行研究は、華僑・華人社会の核に幇を据え、その幇の成員間のネットワークを分析したものである。しかし、注意しなければならないのは、これらの研究の分析レベルはどれも、中国系社会（中華）を「世界」としており、中華に対するアイデンティティの所有が前提にある。そして、その中華アイデンティティが、最も広い枠組み＝「世界」として捉えられているようである。よって、以上の研究は華商ネットワークとはいっても、「内向き」のネットワークを見ているといえよう（図2）。しかし、本論の分析レベルは、中華を「世界」とする先行研究とは異なり、外部世界との繋がりも分析しており、「外向き」のネットワークをも捉えている。現実的、客観的視点から、華僑・華人をめぐる環境を意識し、中国、居住国さらには関連する他の諸国をもとに、国境を越えたよりグローバルな社会を視野に入れている（図3）。かつては、華僑・華人を語る際、中国に対するアイデンティティを有していることが前提にあり、華人社会において同郷として、もしくは同宗（血縁関係）としてのアイデンティティが強調されていたことは確かである。しかし、今日では、世代交代が進み、居住国での出身者が増えるに連れて、アイデンティティも多様化している。アイデンティティはもはや彼らにとって、国境だけで割り切れるものではなく多元化しており、また、時と場合によってさまざまに変化するものである。このように、ネットワークを構築する個々人を形成するアイデンティティが変化しているため、華商ネットワークの分析レベルも新たな視点に立たねばなら

図2　狭義の＝内向きの世界観

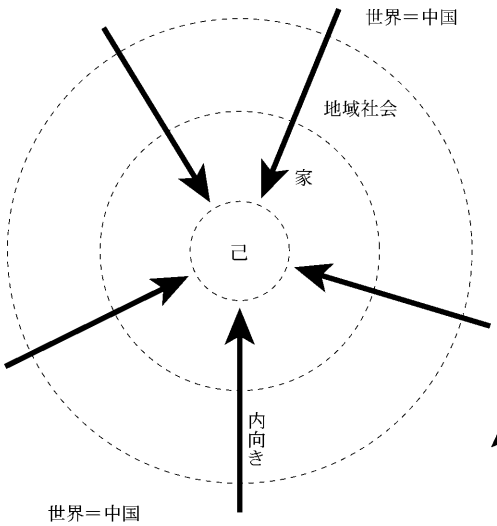
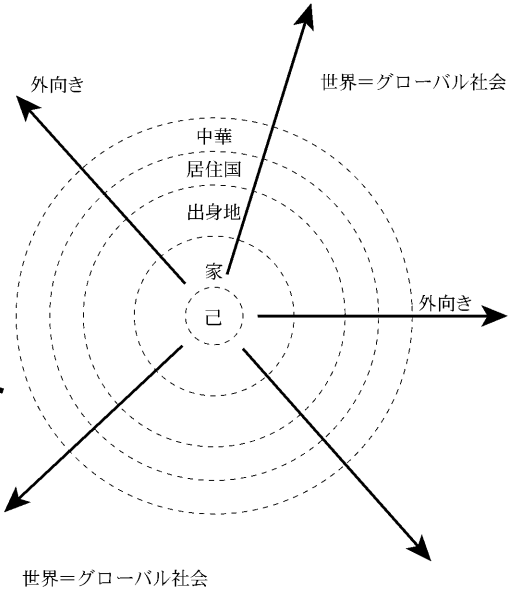


図3　広義の＝外向きの世界観



なくなっている。

2. 華人ネットワーク論の諸相

上に見てきたような、幇という華人社会内のネットワークのあり方に注目するという視点を継承しながらも、国家や地域システムなどより広い環境を視野に入れ、1970年代頃から始まったアジア経済の成長と一体化した華僑・華人の経済活動に注目した研究が発展した。これは華人ネットワーク論と呼ばれている。こうした研究では、いわゆる「華商」（華僑・華人で商業に従事している者）が分析対象とされているが、「華人」を以てその代替語としている。そのため、華僑・華人全体があたかも皆、ビジネスに従事しており、経済力を有しているような間違ったイメージを作り上げている。

華人ネットワーク論は、アジアの経済成長において華商系企業や華商資本が顕著な役割を発揮していると分析されたことから浮上してきた。1980年代以降、游仲勲[9]や渡辺利夫[10]、松本國義[11]など、日本の経済学者たちの華商資本に関する卓越した研究がなされ、それによって一部の華商経済の躍動ぶりが明らかにされた。それらの研究では、華商資本はかつて当然であった国民国家の経済とは違い、国境を越えて繋がる独特なネットワーク型の経済によって成り立っていると分析され注目を浴びた。これに続いて、アメリカなどでもアジアの経済発展の原因解明において華人の経済活動を観察した研究が数多くなされた。その代表的なものには、ナイスビッツ（Naisbitt）[12]、ウェイデンバーム（Weidenbaum）とヒュース（Hughes）[13]、シーグレーブ（Seagrave）[14]などの研究がある。また、世界銀行が発表した「大中華経済圏」の形成を予測した報告[15]やオーストラリア政府が発表した報告書[16]など、いずれもアジアの経済成長と華商の経済活動のパターンやその潜在力に注目したものである。

こうした研究の多くは華商企業の成功例に注目し、それに表れている特徴を分析したものであった。家族主義や勤勉性、オーナー経営によるトップダウンの速決力などを例に挙げ、それが彼らの経済効果を向上させていると述べるとともに、なかでも彼らが所有する柔軟なネットワークは特別な役割を果たしていると主張する。そうしたネットワークは、同郷や親族の繋がりなどにより、相互に助け合うことによって成り立っていると考えられ、各居住国にある商会や会館などを含め、華商間の情報や資金の流通を円滑にしているといわれている。また、そこでは、広くは同じエスニシティを共有している者同士がそのエスニシティを基に強固なビジネス・ネットワークを形成しているという見方もされており、世界華商大会の開催などの動きも、こうした分析を支えるものとなっている。

こうした論調は、果たして、華商の真相を捉えているのであろうか。なにか、見落としてはいないだろうか。また、華商はエスニシティで繋がった排他的なネットワークを意図的に形成し、ビジネス活動を行っているのであろうか。上述のような華商に関する研究は、華僑・華人に対し、ある種の固定的なイメージを作り上げているように思えて

ならない。そして、それは、観察者の視点や、観察者が華僑・華人に対して潜在的に持っている先入観があるように思われる。つまり、観察者は華僑・華人を観察する際、その対象が華僑・華人としてのアイデンティティを持っているか否かに対し、疑問を抱いていない。そうした前提、つまり華僑・華人＝中華だという色眼鏡を通して彼らを観察しているため、それは自ずと、中華世界以外の世界において活動している華僑・華人を見落としがちであるという限界を有している。

華僑・華人が中国系移民であり、中華世界との繋がりを有していることに異論を唱えるつもりはない。しかし、筆者は、華僑・華人一人ひとりに対するインタビュー調査を通し、彼らの所属やアイデンティティが、極めて多重であり、可変的であることを発見した。こうした、華僑・華人一人ひとりの根底に潜んでいる意識的な世界や価値観を理解してこそ、彼らの行動や彼らが形成するネットワークの真のあり方を把握することができるのであると痛感した。筆者は、華僑・華人が有する複雑で多重なネットワークとアイデンティティの分析を通し、虹という自然現象を比喩に用いることによって、それを正確に、しかも、捉えやすくすることができることを発見した。以下では、その虹のメタファーによって、華商のネットワークとアイデンティティの本質を見てゆきたい。

IV. 虹のメタファー

1. 虹の性質と華商ネットワーク

虹といった場合、自然界のなかで多様な色が重ねられてできたアーチ状の橋が空に架けられている光景が想起され得るであろう。虹は、大気中にある水滴が太陽などの光線を浴び、その光線の角度によって多様な色を放射し、私たちの目に映ったものである。しかし、虹は角度によって見えたり、見えなかったりするだけでなく、多彩な色を放射させる光線の熱によって水滴が蒸発してしまうと姿をなくしてしまうものである。つまり、虹はあるようでないような、出現したと思うとなくなってしまう、曖昧でしかもはかない性質を持っている。このような、虹の持っている性質を比喩として用いることにより、華商のネットワークが持つ特性を説明することができよう。

まず、水滴は、華商の経歴に喩えることができる。筆者が注目している華商は、祖国の混乱や不安から逃れ、異国の地に新しく生きる術を求めて生地を後にした移民集団である。中国語で華僑が遠地に移住することを「出洋過海（chu yang guo hai)」と表現されるように、彼らは、しばしば海を越え、外国の地に移民していった。そして、移民である彼らは、外国である移住先において裸一貫から基礎を固めるため、しばしば、人一倍努力する必要があった。ある程度の財を持ち、より良い生活を求めて移住した者や事業拡大という野心を持って海外に出た者でも、異国で新しい環境や生活に適応するために

は多くの忍耐と努力を必要とする。彼らは、一方では日々新しい挑戦に立ち向かい多くの汗を流し、他方では故郷に残した家族を思い、涙なくしては語れない経験をしている。

例えば、香港で印刷業を営む上場企業の社長である林光如の経験は華商の典型的な例であるといえる。1950年代、中国の共産化による政治的混乱と故郷における経済・社会的困難から逃れるため、故郷であった広東省から海を泳いで香港に渡ったという。香港にたどり着いてからも、家族と離れ離れになったための孤独感や、新しい社会での疎外感などから挫折を感じ涙を流すことは少なくなかったと語る。また無一文の移民として居住地において生活の基盤を築くためには、昼夜を問わず一生懸命働くことが必要であったという。こうした経験を通し、一軒の小さな印刷工場からはじめた彼の事業は、現在ではアジア各地に大きな工場を持つ多国籍企業に成長した。また彼は、香港では特別行政区第一期政府推選委員会委員、中国では人民政治協商会議広東省委員会委員などの要職を務めるようにもなっている(17)。

上に見たように、華商の経験は大きく分けて三種類の水滴に喩えることができる。第一に、移住する際に越える海の水滴、第二に、家族との別れや新しい環境での苦労により流される涙の水滴、そして勤勉な労働によって流される汗の水滴である。こうした、華商が経験する奮闘の結晶が、虹を形成する一つの要素である水滴に相当する。

他方、虹が出現するには光線が必要である。水滴を虹色に見せる光線は、その角度によって虹の見え方が変わるのと同様に、虹を見る主体やその見方によって異なって見える。虹は、橋のように大きな半円であったり、そのほんの一部であったり、または同じ瞬間でも、角度を変えて見れば、なにも見えなくなることがある。そうした虹のように、華商のネットワークというものも見え隠れしたり、もしくはそれが実在したとしても機能しているか否かは実情をつかみにくい。

華商ネットワークを映し出す光は、注目を浴びるという意味での「外在的な光」と、華商自身が放つ「内在的な光」の二つに分けることができよう。1990年代半ば頃まで、アジアにおける華人経済が急速な成長を遂げたため、世界銀行や日本をはじめとする各国の研究機関は、華人経済の繁栄や成功の秘訣を解明するため、さまざまな研究を行った(18)。また、多くの雑誌や出版物も華人経済を取り上げ、例えば、フォーブスなどの富豪のランキングはしばしば華人が首位をしめていた(19)。こうした動きはいうまでもなく外部から華商を照らす光であり、その照らし方や角度によって、「華人ネットワーク」に対する華やかなイメージや、「アジア成長の旗手たち」の連携などのイメージを作り上げた。それはさらには「大中華経済圏構想」や「中国脅威論」を生み出す影響力を持つという見方さえできる。

また、一方では華商自身も、自己の成功と繁栄を顕示し、注目を集めることがある。例えば、故郷や地元コミュニティーなどにおける寄付や献金などが挙げられる。「衣錦帰郷（yi jin gui xiang)」（錦を着て故郷に帰る）という言葉が表すように、財を成した後、故郷において錦を飾るため、寄付や献金をして学校などを設立し、故郷に名声を残してい

る。また、居住国のコミュニティーにおいても、活動や会合などの際に寄付を行い、名利を残そうとする傾向がある。そして、広い家に住み、高級車に乗るなど物質的な面で、世間の注目を引き付けている者がいるのも否めない事実である。これは、華商自身から発した光であり、労苦の積み重ねによって達成された成功が栄光として外部に向けて放出する光となっているのである。

こうした、大きく分けて二種類の光線が水滴に射すことにより、華商のネットワークは鮮やかな色で飾られた虹となって現れる。多彩な虹は、華商の経済活動がしばしば華やかなものとしてイメージされるのと類似しているといえよう。しかし、華商のネットワークは虹が見え隠れするのと同様に、世論や周囲の注目度と視点の置き方によって、その存在と機能を変化させる。彼らのネットワークは有名無実であったり、場合によっては組織されていなかったものが必要以上の機能を果たしたりする。また、華商ネットワークを観察した先行研究のなかでは触れられてこなかった一面であるが、それは注目を浴び一定期間が経過すると、低調になり、場合によっては姿を隠したり、機能しなくなったりする。これは、華商が何処へ行ってもマイノリティであるという半宿命的な現実が一つの理由である。例えば1998年に起こったインドネシアの排華運動のケースでも明らかなように、華商の繁栄は一定の注目を浴びると、嫉妬や脅威論に繋がり、危機的状態に入るとスケープゴートになり、その存在価値が裏目に出てしまう(20)。その結果、華商のネットワークは機能を失う。つまり、外在的な注目を浴びすぎた場合、被害を避けるために影を薄めたり、身を隠したりする。この現象は虹が出現するのに必要な水滴と光の関係と同様である。光線を一定以上浴びると、水滴は蒸発し、空に架かっていた鮮やかな虹は消えてしまう。華商のネットワークもまさに、虹が持つ自然現象に類似した特質を持っているといえよう。

2. 華商アイデンティティの多元性と虹の重層性

虹ははっきりと分けられない七つの色が重層を成してアーチ状に形成されたものである。この多様な色で形作られている虹のように、華商は多様なアイデンティティを持ち、彼らはさまざまな所属、帰属意識や人間関係の複合のなかで活動を行っている。いわゆる華商ネットワークは、こうした重層的な関係の結果成立しているという点で、七色のアーチが重なって形成される虹が持つ性質と類似している。

華商のネットワークを構成している要素を判別することは容易ではない。それは人や時間、場所、そして遂行する事業の内容によってさまざまに変化する。しかし、あえてネットワークの構成要素を虹が形成される七色に喩えるならば、以下の七つのカテゴリーに大別されよう。

(1) 居住国との繋がり

まず第一に、居住国との繋がりは華商ネットワークを形成する基本的な要素である。これについては、居住国国籍を基にした法的な繋がりである側面が大きい。現在、華商

は移住先の国籍を取得した者が多数を占めている。居住国との繋がりは華商ネットワークを形成する基本的な要素であるといえる。国籍法で出生地主義を取っている東南アジアの華人に関して見れば、現地の国籍を持っている者が大部分を占めているといわれている(21)。彼らは、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシアなど、それぞれの移住国の国籍を持ち、その国の一員として生きている。例えば、タイに居住する華人は、政治的、法的にもタイ国政府の保護下にあり、海外で有事の際に駆けこむ大使館はタイの大使館である。アメリカなど民族と国籍が混合した土地にいる場合や英語で自分の所属を述べる場合、特にその人の民族的な背景と国籍上の法的な繋がりとの差異が顕著に表れてくる。日本語で「何人ですか」に相当する「Where are you from?」の質問に対しては、中国語を話せ、中国人と同じ民族的な背景を持つアジア系アメリカ人で、アメリカ国籍を持つものは、「I am from the United States.」(「アメリカ人である」)と答え、自分の民族的な所属である「Chinese」(「中国人・中国系」)であるとは答えない。これは、明らかに国籍を基本にした居住国との法的、政治的な繋がりを表している。中国への返還による政治的な変動を恐れ、多くの人々が香港を離れ、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに移民し、現地の国籍を取得する動きがあったが、それは国籍など法的な繋がりの一例であるといえよう。香港は国際都市として、人、物、金が激しく流動する地であることは改めていうまでもない。こうした香港には、さまざまなバックグラウンドを持った人々が集まっている。同じ中国系であっても、法的な帰属が分岐している人々が集まっており、華人のディアスポラを香港で垣間見ることができる。香港で人に会う際は、昼頃に飲茶(ヤムチャ)をするというのが通例であるが、そうした席において、華商たちは同じ民族的背景を持ち、同じ広東語を話し、同じ食文化を享受していても、カナダ人であったり、アメリカ人であったり、マレーシア人であったりと法的な帰属はさまざまである。祖国において政治的・経済的に不安定な生活を経験した人々は、こうした法的な帰属ないし保障を求めて海外に移住する人々が多い。

他方、法的な帰属とともに、その国で生まれ育ち、生活に慣れ親しんでいることから形成される社会的な帰属意識も存在する。日常の生活で身を置いている環境、社会、国家を密接に感じることはごく自然なことである。筆者がインタビューを行った、香港で人材派遣会社ワン・アンド・リー・アジア・リソース社を経営するラリー・ワンは、自分をアメリカ人であるという。ラリーはアメリカに生まれ育った中国系二世である。中国語はヒアリングが少しできる程度で、話せずに育った。1985年彼が25歳の年に、祖母とはじめて中国へ旅するまで「もう一つの祖国」のことは特に意識してこなかったという。生活様式、文化的な価値観、交友関係は西洋的であり、友人も非華人系の者が多かった。祖母との旅を契機に、アジアでのビジネスチャンス、そして自分のアジア系移民としてのバックグラウンドに目覚め、それを有効利用し、アメリカからアジア、特に中国、香港、台湾に進出する多国籍企業に中国語・中国文化の能力をもつバイリンガル・バイカルチュラルな人材を紹介する派遣会社を設立し、事業を始めた。今では華人

系、アジア系の友人が増え、華人としてのアイデンティティも形成されているが、自分はやはりアメリカ人であるという。特に、中国系社会においてビジネスをする際、食事や酒など接待の席で友情を醸成し、それを基にビジネスの交渉が行われることが多いが、そうしたスタイルには違和感を感じているという。むしろ、ビジネスはビジネスの場で話し、プライベートでは、友人とバーでスポーツ観戦をするようなアメリカの生活スタイルが自分には合っているという(22)。ラリーは、アメリカ人としての人的・社会的繋がりを持っており、それと華人としての繋がりをバランス良く融合させることで現在のビジネスを運営している。

以上に見るように、居住国に持つ法的・社会的な繋がりによって形成される帰属意識は世代の交代と共にアイデンティティの重要な部分を占めるようになっているのである。

(2)「中華」文化との繋がり

第二に、「中華」との民族的、文化的な繋がりがある。これは前に述べた国籍を基にした法的な繋がりとは異なる次元のアイデンティティである。つまり、ここで用いている「中華」という概念は地理的、政治的な意味で使われる「中国」という概念とは異なる。これが中国と表さず、「中華」と表す所以である。本論は「中華」を民族的、文化的概念として捉えており、それがある程度広義で曖昧なものであることは認めざるを得ない。例えば、香港や台湾からカナダへ渡った中国系移民は、カナダの国籍を持っていても民族的には中国系であるという帰属意識を持ち、そして文化的には「中華」文化に愛着を持っているのが一般的な傾向である(23)。アメリカに住むベトナムからの難民・移民に関しても、彼らの多くは戦火を逃れてきただけでなく、華人であるがために迫害され、ベトナムを離れることを余儀なくされた人々である。彼らは、チャイナタウンの一角に移り住み、ベトナム料理店などを経営している。彼らもまた、ベトナム出身であるが、中国系としての帰属意識を持っている。また、文化的にはベトナム文化と中華文化が融合した独自の文化を創出している。

世界の多くの国々に居住する華商はその呼び名に「華」が付くことが示すように、彼らは「中華の血」を受け継いでおり、その血の繋がりはネットワークを築く一つの強力な要素となる。それは世代を越え、混血が進んだとしても、依然としてアイデンティティの一部を形成する影響を持っている。この第二のカテゴリーで指す「中華」文化との繋がりは、文化的、民族的な「中華」に自己のアイデンティティを感じる人々について指摘できる。彼らは「華」の一員であると捉えることが可能であり、中国、香港、台湾、シンガポール、フィリピン、アメリカ、日本などの華人はみな、法的なカテゴリーでの帰属は違っていても、このカテゴリーで同じ「中華」の民族的、文化的背景を分かち合うものとしての繋がりを持っている。

1998年9月、筆者が94年に香港中文大学に所属しフィールドワークを行っていた際に、中国語を学んでいた白人の友人であるピーターにアメリカで再会し、彼を介して彼の友人であるイアンとの出会いがあった。イアンは、一見、黒人またはカリビアンに見える

30代前半の男性である。仕事や専門の話をしているうちに、彼のアイデンティティが中国的な要素に多く影響されていることが明らかとなった。当初、彼と「中華」文化との繋がりの関連性を連想することはなかったが、実は、彼はトリニダット・トバコ出身の中国系三世であった。20世紀初頭、彼の祖父はサトウキビ畑の労働者として働くため広東を離れ、トリニダット・トバコに渡った。現地で稼いだ金を故郷に送金し、いつかは故郷に戻ると思っていたが、やがて現地の人と結婚し永住することに決めた。そして、彼の父もまた、現地人である母と結婚した。そのため、三世であるイアンが受け継いでいる「中華の血」は割合からいえば、非常に低いものである。よって、見た目には決して中国系には見えないが、彼は中国語を話し、「中華」文化の影響を強く受けている。筆者が華人の研究をしているというと、「僕が一つのケースとなるであろう」と華人としてのアイデンティティを抱いていることを自ら示した。

以上に指摘した「中華」文化の繋がりは杜維明のいう「文化中国（Cultural China）」という概念に近い(24)。杜によれば「文化中国」は、三つの象徴的世界の継続的な相互関係によって形成されるものであるという。それは第一に、中国大陸、台湾、香港、そしてシンガポールなど、「中華」文化と中国系人を主として形成された社会である。第二には、世界に広がる華人コミュニティーであり、彼らはそれぞれの社会において政治的にも、そして人口比率という点からもマイノリティである(25)。そして第三の象徴的世界は、中国系人でない個人で、中華文化や中華世界に関連した事物に興味を持つ者であり、例えば、学者、ジャーナリスト、企業家、ビジネスマン、通訳、作家など、中国に関する知識を持ち、そしてその概念をそれぞれの言葉で表し、自国で伝播しようとする人々である。杜のいう「文化中国」は、民族的なカテゴリーを超えたもので、中華文化への知識を持つ者であれば彼らも含まれる。筆者も以上の観点には同意するが、付け加えるならば、それは杜が注目している知識階層に限られるものではないということである。情報の入手や移動が容易かつ頻繁になった現代において、異文化に対する接触と理解は、より広範囲の者が容易に実現できるようになっており、知識階層に限定されたものではなくなっている(26)。

筆者のいう「中華」文化の繋がりは、杜のいう「文化中国」の世界観にあるダイナミズムの主要な要素である。この「中華」文化の繋がりはすでに述べたように曖昧であるがゆえに可変的なものであり、それは華商の移民としてのアイデンティティと重複してユニークな働きをする。

(3) 出身地の繋がり

第三のカテゴリーは、出身地に基づく繋がりである。国が広大であるがゆえに生じる風習文化や方言の差異の所以か、中国人にとって出身地のアイデンティティは国家のアイデンティティにも優るものであるといわれている。世界の華人コミュニティーを見ても、出身地をベースにした組織が最も多いことは一目瞭然である。特に、一世にとっては同郷の集まりは特に強い繋がりとなる。類似した生活経験を持ち、ましてや同じ方言

を話す者同士は親近感が湧きやすく、信頼関係や相互扶助の意識も強まりやすい。

よって、華商のネットワークという場合、それはしばしば出身地をベースにした繋がりを指していることが多い。歴史的に検証されているように、華人間の送金や物流のネットワークはしばしば、同郷人の相互扶助関係によって成り立っていた[27]。海外で働く華商が故郷に残した家族に送金する際、銭荘が利用されていたが、銭荘は出身地ごとにあり、例えば、広東にお金を送るなら広東系が経営し、その地域にネットワークを持つ銭荘を利用することが当然であった。しかも、その同郷者間のネットワークは送金以外の機能をも果たしていた[28]。広東の潮州系は移民を多く出した土地として知られている。東南アジア、特にタイには潮州人が多く、タイで生まれた三世、四世などは華語（マンダリン、北京語）が話せなくとも潮州語が話せる人が多い。この方言の所以か潮州人は同郷人同士で取引することが多く、例えば海産物の業界では潮州系のネットワークが強い。香港の上環やシンガポールのノースカーネル通りにいくと干物海産物の小売店が並んでいる。ナマコやフカヒレ、アワビなど高価な海産物が取引されている。筆者が現地調査したところによると、この市場は潮州系に握られ、タイ、マレーシア、日本、オーストラリア、中南米などの潮州系が仕入れや卸の流通ネットワークを握っているといわれている[29]。

移住先の選択においても同郷のネットワークは大きな影響力を持つ。マダガスカル出身の華人で現在カナダに在住している謝女史によると、マダガスカルは広東省でも特に南昌出身の者が多数を占めていたが、それは当時、移民の情報が限られた地域の人々にしか伝わらなかったからだけでなく、現地の華人が居住国政府に南昌出身者を優先するように請願していたからだという[30]。

他方、移民の形態は時代によって異なり、そのため出身地の分類法は多様化してきている。20世紀前半、東南アジア地域に渡った華人に関しては、中国の南部、特に福建、海南、広東一帯などからの移民が多く、これらを出身地ごとに分ける場合、伝統的な方言集団を基本とすることができた。しかし、20世紀後半になると華人系は多様化する。1960年代以降、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに向けて香港、台湾、さらには東南アジアなどから再移民する人々の流れがあり、さらに、1980年代以降は改革開放政策の波に乗って中国本土からの新移民が急増した。よって、出身地の繋がりといった場合、それはかつての方言集団という分類法ではなく、むしろ政治実体によって分けられた「新しい出身地」の繋がりがより実質的な機能を持ち始めている。それはコミュニティーの形成にも表れている。ニューヨークを例に挙げれば、現在同州には三つのチャイナタウンがあり、一つはマンハッタンにある老華僑によって形成された古いチャイナタウン、二つ目は1960年代、70年代に台湾や香港から移民してきた人々を中心に形成されたフラッシングにあるチャイナタウン、そして三つ目はブルックリンのコミュニティーであるが、ここは家賃が安価なため1980年代以降、中国特に福建省から移住したばかりの者が集住している[31]。また、かつて華人移民は居住地においてチャイナタウンを形

成することが通常であったが、近年の新しい移民はショッピングモールを作る傾向が強い。そうしたショッピングモールも、かつてのように方言集団によって固まるのではなく、「新しい出身地」、つまり、香港系のモール、台湾系のモール、東南アジア系のモールなどというように形成されている特徴が挙げられる(32)。

(4) 「家族」の繋がり

第四のカテゴリーとして家族的な繋がりが挙げられる。華人が「家族」という言葉に対して抱くイメージは、現代一般的にいう核家族という単位を超えているものであり、多様な意味で解釈し、さまざまなレベルに分けることができる。

まず初めに、親子、兄弟、親戚関係など血縁に基づく家族の繋がりがある。特に、政府の保護下にない移民の経験を持つ華商が最も信頼し頼りとするのは、血の繋がりを持つ家族である。それは、華商企業を分析した場合、大多数の会社の所有権が親族で占められていることからも窺い知ることができる。1980年代以降、東南アジアにおいてコングロマリットに成長した華商企業が続出したが、そうした企業の所有権も依然として親族で固められていることが多いのが明らかにされている(33)。

次には、友人、知人、さらには仕事仲間と家族的な関係を構築することがしばしばある。費孝通(34)のいう拡大家族（Extended Family）や擬似家族（Fictive Kinship）がそれにあたるであろう。華人同士の間では、交際関係の古い友人や、信頼関係が構築されると、相手を擬似家族として扱う。例えば、呼び方も兄弟や親戚を呼ぶのと同じように、名前と共に、相手の年齢やバックグラウンドに合わせて「～～媽々（ママ）」「～～大哥（お兄さん）」などと呼ぶ場合がある。特に同郷出身の者同士は、こうした呼称を使用する傾向が強い。そして、親とその友人の関係に合わせて、子弟たちは親の友人を「伯父」や「伯母」、その子たちを従兄弟のように呼び合う。こうした繋がりは、場合によっては故郷など遠くにいる親戚よりも親密で、しかも相互扶助の機能を果たすことがある。例えば、肉親を離れて20代で渡米した高氏は、アメリカに親戚を有していなかったが、母の古くからの友人である何女史に面倒を見てもらい、有事の時はいつでも相談し、普段も頻繁に連絡をとっている。高氏は母より数歳若い何女史を「阿姨（アーイー・叔母の意）」と呼び、親戚のように交際しているという(35)。

さらに、より拡大された家族的な関係は、宗親（lineage）である。宗親会は、同じ苗字を有する人々を基本として形成される組織である。直接的な血縁関係がなくとも、先祖を共有するであろうという理由付けで連帯関係を構築している。こうした組織は、共有する祖先を祭るという儀礼を共に行うことを通して、帰属意識や友情、信頼を構築し、相互扶助、共同事業をしようとするのが目的である。同じ祖先を持つ者と限定しているため、非常に排他的なイメージを持たれるが、筆者はフィールドワークを通して、それが極めて曖昧な繋がりであると認識するようになった。特に、近年、会への参加者は厳密にいう宗親以外の人もいるが、大会への参加者は「付き合いのため」といったように人的なネットワークの構築や持続を目的にしている傾向が強い。それは、ビジネスを行

う華商にとって、いざという際、こうした繋がりも運用できるからであろう。宗親会においては、共有する祖先のルーツや歴史を調査し、共同の文化財を残そうという動きがあると同時に、不動産業や投資など、ビジネス面での連繋も多く見られる[36]。

(5) 出身校の繋がり

第五のカテゴリーとして、出身校の繋がりが挙げられる。中国語で表す校友会や同学会がこれにあたる。校友会は、同じ学校の卒業生全体で結成される組織であり、同期の卒業生だけで組織される同窓会よりも広い繋がりである。同学会は卒業後ではなく、在学中に結成される、いわゆるサークルであり、在学中からさまざまな活動を共に行うことによって関係を醸成する。こうした学校の繋がりはもちろん華人特有のものではない。特にアメリカや日本では、出身校の繋がりが強く、学閥などといわれ、社会での影響力は強い。ビジネス界での情報のやり取りや就職活動の際も出身校の繋がりが大きな影響力を持っている。日本でも知られているように、東大法学部卒が官庁、そして三田会がビジネス界などと、出身校のネットワークは一定の影響力を持っている。華人に関していえば、出身校の繋がりは移民二世以降や近年になってようやく影響力を持ち始めているネットワークである。

これまで華人のネットワークを見る際、多くは地縁関係や血縁関係などに焦点があてられ、出身校の繋がりについて語られたことはほとんどない。というのも、移民一世、特に華南からの移民は、多くが労働移民であったため、高等教育を受けておらず、出身校の繋がりというものは、華人社会において強い影響力を持ち得なかった。移民一世が十分な教育機会を得られなかった経験の反動か、それとも移民先社会において地位向上を目指すための手段か、教育を重んじ、子供に高等教育を受けさせ、それを誇りとする傾向がある。華商にインタビューを行う際、必ずといっていいほど、彼らの子孫がどこどこの有名大学の出身で、医者、弁護士、博士であるという話になることが多い。こうした、教育重視傾向により、出身校の繋がりは明らかに強まっている。特に幼い時期に移民経験を持つ者は、大学在学中に同じ移民としてのバックグラウンドを持つ者同士で同学会などを結成している。

筆者は、ハーバード大学において研究中、同大学におけるこの種のネットワークの機動力を観察する機会を得た。華人の学生団体は大きく分ければ、出身地で分けられ、中国大陸出身、台湾出身、現地出身もしくは幼い頃からアメリカで暮らしている者に分類できる[37]。こうした団体は、頻繁に活動を行っており、緊密な繋がりを持っている。しかも、ハーバード大学など政府官僚や政界、財界に一定の影響力を持つ人などが頻繁に訪問するような大学の同学会は、政府に対し意見提言をするなど、サークルの活動は広範囲に及ぶ[38]。例えば、ハーバード大学の大学生で結成されている中国同学会（Chinese Student Association）は、アメリカ出身者や移民二世を中心として結成されている。彼らの活動は、自分たちのルーツを常に意識したものである。アジア系アメリカ人に関する問題の討論をし、中国の暦に関連した祭日を祝い、週末はチャイナタウンで新移民やそ

の子供たちに英語を教え、新移民への生活の補助も行っている。彼らは華人コミュニティー、政界、財界とも関わりを持っており、しばしばコミュニティーの活動に駆り出されては、その見かえりとして活動資金援助を得ている。

また、近年の移民やその子孫は高学歴者が増えており、出身校の繋がりはますます強力な影響力を持ち始めている。しかも、高等教育を受けている時期に形成された繋がりは、興味や専門領域が類似している場合が多く、卒業後仕事についてからも協力し合う可能性が高い。特に華商の子孫の場合、欧米で経営学修士（MBA）などを取得する者が増えており、MBAコース修学中に築いたネットワークは、以後彼らがビジネス界において活動をする際に利用されることがある。例えば、ワン・アンド・リー・アジア・リソース社は、MBAのクラスメイトであったアジア系アメリカ人のワン氏とリー女史で起業された人材派遣の会社である。彼らは学校で築いたネットワークを基に会社を興しただけでなく、依然として欧米の大学出身者の人的なネットワークをビジネスの資源としている。

（6） 同業者の繋がり

第六番目のカテゴリーとして、企業組織や同業者間のネットワークが挙げられる。華人社会においては、商会がこの代表例である。華人はしばしば、個人で零細企業を興すことが多い。商会はこうした企業家を中心にした集まりであり、定期的に会合を開き、ビジネスの情報を交換し、ビジネス上の相互扶助を促進している。また、メンバーが事業を興す際に必要な援助も行っている。商会は企業家の集まりであることから、資金調達力が高いだけでなく、共同の利益を追求する開放的な組織であるため、華人社会において、共同事業の開発や各種問題の処理を仲介するなど重要な役割を演じている。これは、いわゆる「傘型組織（umbrella organizations）」として、華人社会を統合する機能を持ち、しばしばビジネス以外の需要にも応え、しかもコミュニティーの代弁者としての役割も果たしてきた。その代表例として、中華総商会が挙げられる。近年の経済のグローバル化と共に、商会の活動も国際的なスケールで行われるようになっており、特に世界華商大会が注目を浴びている。これは、世界各地の中華総商会が「傘型組織」としてそれぞれの地域の商会を組織し、2年に1回開いている国際会議である。そうした国際会議には各地から地域の代表団が参加し、毎回約80ヵ国から1,000人ほどが集まり、ビジネスに関する情報の交換や相互扶助などを行っている(39)。

商会は特定の出身地や業種に細分化して組織されることもあり、これは幇（bang）や行（hang）と呼ばれる。これらはギルドのようなものであり、より特化した情報のやり取りを行っている。

（7） 信条、趣味そして余暇の繋がり

最後に七つ目のカテゴリーとして挙げられるのは、より日常生活に密着した信条、趣味、嗜好を通じた繋がりである。それは例えば、宗教、芸術、音楽、運動、その他の趣味などを共有することによって築かれた繋がりである。これは、華人社会において、新

たに強まっている繋がりであり、華人ネットワーク研究では、未だ十分な分析が行われていない。

このネットワークは、新移民によって築かれた新しいタイプのものである。1970年代以降、香港、台湾を中心に北米などに移住した新移民の多くは、経済的に比較的裕福であり、しかも教育水準が高く、専門知識を持った者や、すでにアジアにおいてビジネスの基盤を持っている者が多い。彼らはかつての移民グループと比べ、時間的にも経済的にも余裕があるため、日々の時間を全て仕事に費やす必要はなく、生活において追求するものも物質的なものから精神的な豊かさへと変化している。そのため、趣味や余暇にあてる時間が比較的多く、華人のコミュニティーにおいて近年新たに結成された社団や組織の多くは、宗教、芸術文化、そして、ボランティアなどの活動をしている者が多数を占める。

例えば、近年世界各地の華人コミュニティーにおいては、中華文化中心といわれる、いわゆるカルチャーセンターの建設ないし組織化が進められている(40)。こうしたカルチャーセンターでは、芸術、音楽、語学など各種の授業が開設され、特に子供や女性が活発に活動に参加しているのが目立つ。この動きは、移民社会がより現地化している一つの表れであるといえよう。かつて、華人コミュニティーの組織は同郷や同業による組織など、いずれも男性や経済活動に焦点をあてたものが多かった。それは、華商が移民先の社会を仮住まいとして捉え、男性が家族を故郷において単身で出稼ぎに出るという移民形態が主であったためであるといえる。しかし、現在ではむしろ家族揃って移民先に根を下ろすというローカライゼーションの傾向が強まっている。このように現地化が進んでいるため、反面では、中国の文化や言語を修得する環境が必要であるという意識も高まり、カルチャーセンターなどの建設が進められているという見方ができよう。

一方、早期に移住した華人に関しても、生活基盤や事業が確立し、生活の安定が確保されているため、余暇を享受するようになってきている。こうした変化は、ポスト近代における人類の生活形態の自然な変容傾向であるといえる。これについては、勤勉で節約家であるというイメージを持たれてきた華商たちに関しても例外ではなく、彼らは余暇の場面において人的ネットワークを形成することが多くなってきている。また、特に近年は宗教的な繋がりが非常に大きな影響力を持っている。例えば佛光山や慈済などの新興宗教のネットワークは特筆すべきものがある。これらは、台湾からの新移民を中心に形成されている宗教団体であり、世界の華人コミュニティーに浸透している。コミュニティーでは、移民やマイノリティとして生活する人々の心の拠り所となり、多くの信奉者（特に女性が多い）を吸収している(41)。こうした団体は、対外的に慈善活動を行っており、収集された寄付金はしばしば世界の被災者に送られているという。華人社会における、こうしたネットワークの勃興とグローバル化は華商のネットワークを見る際に軽視できない新しいダイナミズムである。

V. 華商ネットワークのダイナミズム

1. 国際的な役割と脆弱性

以上において、筆者は虹が七色で形成されるという自然現象に照らして、華商の繋がりを七つのカテゴリーに分けて見てきた。しかし、華商のネットワークが必ずしも、ここに挙げた七つの繋がりに分類できるというわけでもなければ、こうした繋がりが七つ揃わないとネットワークが形成されないという厳密なものでもない。むしろ、虹が七色であるといわれながらも、はっきりと識別できないように、華商のネットワークも多方面にわたる繋がりとアイデンティティが統合され、極めて曖昧なまま形成されているのが実状である。華商は意識的にも無意識的にも、今日この場では中国人、他の場でマレーシア人、また明日は違う場で潮州人、または、どこどこ大学の出身者などと、彼らの持つあらゆる個人的なアイデンティティを、社会的資源として事業に有効利用している。そして、華商のユニークな特徴は、彼らの移民としてのバックグラウンドのゆえに内在する、少なくとも二つ以上の国家、社会、文化との深い関わりから派生する、異質なものに対する高い適応力と柔軟性にある。そして、こうした柔軟性に付随してくる多種多様な繋がりが、彼らのネットワークを形成している。このような華商特有の背景ゆえに、華商のネットワークは虹が持つ性質に類似した表れ方をする。それを以下に見てみよう。

第一に、自然界で虹が空に架かった橋に見えるように、華商のネットワークも国籍や文化の差異、そして国境を越え、国と国、地域と地域をつなぐ橋のような役割を演じている。繰り返し述べているように華商は複数の文化や社会への一定の理解と帰属意識を持っているので、異文化間の橋渡しの役割を演じるのに長けている。だが、皮肉にも、華商のネットワークはしばしば排他性を持ち、非華人系が入りこめないものであるという印象が持たれている。

しかし、実際のところ、華商ネットワークは華人以外にも開かれたものである。世界華商大会を例に取ってみても、その会合には非華人系のビジネスマンも参加しており、しかも、「実際にビジネスプロジェクトの話が進められているのは華人系の企業同士よりも、非華人系の企業と中国本土の企業であることが圧倒的に多い」と越氏はいう。越氏（バンクーバー華埠商会会長）が、1997年バンクーバーにおいて開かれた第四回世界華商大会を主催して実感しているように、華商のネットワークは、華商間のビジネス協力の促進よりも、中国本土と諸外国のビジネスの仲介をするという面でより卓越した機能を果たしている(42)。つまり、華商のネットワークは排他的というよりも、「他者」を引き込む際に必要とされる媒介の役割を演じている。そして、このような機能を果たしてこそ華商ネットワークの価値が認められるというのもまた事実である。

確かに、ある面で、華商のネットワークは排他的なイメージを持たれてもやむを得な

い性質を持っている。方言や出身地で分けられたグループに基づくネットワークがその一例として挙げられる。しかし、こうしたネットワークは非華人系を除外しているだけではなく、同じ華人同士であったとしても、その方言や出身地が異なっていれば、非華人系の人々と同じように、そのネットワークになかなか参入できないのである。よって、華商のネットワークに排他性があったとしても、それはエスニックなレベルの排他性ではないといえるであろう。

第二に、虹は美しく、とても素晴らしいものに見える。しかし、それは具体的な事物と違い、現象であるゆえ、つかみ取ることはできない。そのため、実際にあるようで、また存在しないような、曖昧で、しかも、はかないものである。華商のネットワークも、しばしば、華やかで、強い経済力を持つものであるかのように美化されてきた。しかし、華商のネットワークも虹のように、つかみ所がなく、実在するようだが、なかなかその実体が把握しにくいという特性を持ったものである。

第三に、虹は水滴が太陽の光を浴びた結果出現するものであるが、その熱によって水滴は蒸発し姿を消すという、はかない性質を持っている。これは華商のネットワークにもいえることである。華商のネットワークというものが注目を浴びたのも、彼らを取り巻く居住国政府や世界が、彼らの経済力と事業上の成功――海外に移住し汗と涙を流して得た結果――に焦点をあて、それを発展させ、活用しようとした結果である。しかし皮肉なことに、華商のネットワークを鼓吹しすぎた結果、「脅威論」が発生し、結局は華商の潜在力を制限するものになっている。華商は世界の彼らに対する「脅威論」の結果、居住国、さらには世界にも警戒され、活動も制限されている。例えば、1980年代末より、華人の経済力が成長し、90年シンガポールの第一回世界華商大会で声高く「華商ネットワーク」の形成が叫ばれた頃、華商は多くの政府、マスコミ、経済界などの注目を集めた。こうした注目は水滴を照らし、虹を出現させる光であった。しかし、こうした注目により、反面で「大中華経済圏」構想、「中国脅威論」が発生し、華商のネットワークの排他的なイメージが強調された(43)。これはまさに、水滴を射して虹を顕わす光が水滴を照らしすぎたことによって、その水滴を蒸発させ虹を消失させるように、ネットワークを利用して橋渡しをするという華商の役割を潰してしまった。そして、悲惨な場合は、98年アジア金融危機の際にインドネシアで暴動が発生したように、経済危機などの不満の矛先が華人に向かい「排華運動」や暴動の犠牲者になったりすることもある。

つまり、光線は虹を生み出すものであると同時に虹を消滅させる働きを持つ。同様に華商ネットワークに注目している論調は、華商のネットワークを生み出すものであるとともに、脅威論を招き華商ネットワークの働きを麻痺、もしくは消滅させるものでもあるということである。

2. 虹、龍、そして華商たち

この他に、虹と華商に関連する文化的ないわれがある。虹は、古くから中国において

龍が交尾しているときに出現するものであるといわれていた(44)。つまり、体を絡め合っている龍が虹として出現すると思われていたらしい。このように古代中国では、虹と龍は同一のものであると考えられていたという。そして、中国系人は「龍的傳人（龍を伝える人)」と表されており、1980年代それを歌にした「龍的傳人」という曲が華人の心情を捉えて大ヒットし、世界の華人社会に知れ渡った。これは、華商の会合の宴会などで、必ずといっていいほど歌われる人気曲である(45)。龍が中華文化と深い関わりを持っているのは良く知られているが、この詩の中でも龍は中国を指し、世界の華人が「龍を伝える人」と喩えられ、そんな龍と虹が同じものであると捉えられていたということは記すに値するであろう。これは、華商ネットワークと虹が有する文化的解釈上の類似性であり、こうした龍と華商と虹の関係性は興味深い。

最後に、中華文化から離れたところでも、華商と虹は依然として関わりを持っている。英語の諺で、「虹をつかめ（catch the rainbow)」という言葉がある。この場合、虹は金(money) のことをさしており、すなわち、金をつかんで成功しろという意味だとされる(46)。一方、華商が海外に移住する理由はさまざまであるが、しばしば、その最大の目的は海外において経済的な成功を収めることである。華商は、そのために、さまざまなネットワークを運用してビジネスに役立てようとしている。本論を通し、筆者は虹を用いて華商のネットワークの本質を分析してきたが、ここで見るように、虹が英語の諺において金に喩えられ、そして、「虹をつかめ＝金をつかんで成功せよ」といわれているという面でも、筆者が挙げる華商のネットワークと虹の喩えは適切なものであるといえるであろう。

VI. おわりに——グローバル社会を舞台とする華商

以上に見てきたような、虹という自然現象と世界に散在する華商のネットワークは、前者が大自然のなかの現象であり、後者が世界システムや国際社会のなかでの表象であるが、それぞれに内在する華やかさ、はかなさ、多様性、ダイナミズム、そして空に架けられた橋のような存在である等の点で共通している。

前述したように、華僑・華人に関する先行研究において、華人ネットワークという言葉はさまざまに使われ、実体が捉えにくくなっている面がある。もちろん、ネットワークという言葉自体が、そのような曖昧性を含んでおり、それゆえヒエラルキーや組織とは別に定義づけられる必要があるであろう。華人のネットワークはその言葉自体、非常に広義なものであり、実体と乖離したイメージを持たれやすい。

華人ネットワークといったとき、それはしばしばマクロな視点でイメージされる。つまり、それは世界の華僑・華人を一つの集合体として捉え、一つの大きな虹を形成する想像上のコミュニティーのように考えられる。しかし、実際、華人のネットワークは極

めて分散したものであり、しかも個人的な繋がりの合成で形成されたものである。したがって、華商ネットワークを分析する際、個人に焦点をあててこそ全体を理解することができる。ここに挙げた虹の喩えは、一人ひとりの華商を分析する際に役立つであろう。華商は個人個人それぞれがネットワークを所有しており、彼（彼女）自身がすでに虹であり得る。彼らは、さまざまなカードを持っており、環境と状況に応じて不同の繋がりを使い分け、独自のネットワークを形成する。これはミクロなレベルでの虹といえるだろう。こうしたミクロな虹の合成によって、さらに多面性を持ったマクロな虹＝華商ネットワークが形成され、あるいは、観察者によってネットワークが見出されたりする。

ここで特に注意を喚起したいのは、華商のネットワークはしばしば意図的に形成されたものとして見られがちであるが、必ずしもそうではないということである。仮説として提示したように、華商は意図的にネットワークを形成したのではなく、むしろ、それは、彼らの日ごろの活動様式が、観察者の見方によって、排他的な性質を持つエスニックなネットワークと見られたのである。なぜなら、観察者は「中華」を「世界」とした内向きな世界観を用い、華商が持つ三縁関係（地縁・血縁・業縁）などのネットワークばかりに注目してきた。しかし、本来、華商は、国際社会に拡がるより広い「世界」を舞台に活動しているアクターである。特に、このグローバル化した現代において、彼らが持つ、こうした外向きの世界観（図3）を考慮に入れて、彼らを分析することが重要である。

華商ネットワークといわれているものは、当初、複数の個人のアイデンティティや彼らの求めるものが共通していたがために自然に形成されたのである。そして、特にアジアの経済成長などにおいて、その有効性が認識されるようになったことにより、環境や時期によっては、ネットワークを意識的に構築する動きも出るようになってきたのである。

華商ネットワークは特定の国家の利益を追求するのではなく、むしろ脱国家的な視点を持ち、グローバルな役割を演じることに適している。一方、強力なナショナリズムや愛国主義が発生したならば、血縁や地縁など生得的な例外はあるが、基本的にそのネットワークは消失したり、機能を失うという脆弱性をも内包している。

（注）

(1) これは一般的に「華人ネットワーク」と称されている。しかし、こうした研究において分析対象となっている華僑・華人は、主に資本家、企業家、商人であり、つまり華商である。筆者は、すべての華僑・華人がビジネスに従事しているという誤解を避けるため、華僑・華人で経済活動を行っているアクターを対象とする際は華商とし、彼らのネットワークについて言及する際は、華商ネットワークとする。

(2) Murray Weidenbaum & Samuel Hughes, *The Bamboo Network: How Expatriate Chinese Entrepreneurs are Creating a New Economic Superpowers in Asia*, New York: The Free Press, 1996; John Naisbitt, *Megatrends Asia: The Eight Asian Megatrends that are Changing the World*, London: Nicholas Brealey Publishing, 1996; Sterling Seagrave, *Lords of Rim: The Invisible Empire of the Overseas Chinese*, New York: Bantam Press, 1995; East Asia Analytical Unit（ed.), *Overseas Chinese Business Network in Asia,* Australia: Department of Foreign Affairs and Trade, 1995; 蔡林海『アジア危機に挑む華人ネットワーク――市場における東西文明衝突の研究』、東洋経済新報社、1998年; 游仲勲『世界のチャイニーズ』、サイマル出版会、1991

年; 渡辺利夫『華人経済の世紀』、プレジデント社、1994年; 岩崎育夫『華人資本の政治経済学』、東洋経済新報社、1997年; 樋泉克夫『華僑コネクション』、新潮選書、1993年; 朱炎『華人ネットワークの秘密』、東洋経済新報社、1995年; 山田修『華僑——最強の家業経営』、日本実業出版社、1996年; 松本國義『華南経済圏——「近代化」中国と華僑』、日本貿易振興会、1992年など。

(3) 渡辺利夫『華人経済ネットワーク』、実業之日本社、1994年; 游仲勲『華僑——ネットワークする経済民族』、講談社、1990年。

(4) ディアスポラ（Diaspora）は民族の離散・分散を意味する。本来、迫害を受け離散したユダヤ人を表す言葉として使われていたが、近年では、世界に点在する民族にも使用されている。より詳しくは、Robin Cohen, *Global Diasporas: An Introduction*, Seattle: University of Washington Press, 1997を参照されたい。

(5) 市川信愛『華僑社会経済論序説』、九州大学出版会、1987年、52ページ。

(6) 陳荊和「華僑の幇問題」、中村孝志編『華僑の社会』、天理大学東南アジア研究室、1972年、97ページ。

(7) 楊建成『華僑之研究』、台湾：中華学術院南洋研究所、1984年; 楊建成『華僑商業集団之実力與策略剖析』、台湾：中華学術院南洋同研究所、1985年、32ページ。

(8) 呉主恵『華僑本質論』、千倉書房、1944年。

(9) 游仲勲、前掲『世界のチャイニーズ』; 游仲勲『世界経済の覇者——華人経営者の素顔』、時事通信社、1995年。

(10) 渡辺利夫、前掲『華人経済の世紀』; 渡辺利夫、前掲『華人経済ネットワーク』。

(11) 松本國義、前掲書。

(12) Joh Naisbitt, *op. cit.*

(13) Murray Weidenbaum & Samuel Hughes, *op. cit.*

(14) Sterling Seagrave, *op. cit.*

(15) World Bank, *The East Asian Miracle: Economic Growth and Public Policy*, New York: Oxford University Press, 1993.

(16) East Asia Analytical Unit（ed.), *op. cit.*

(17) 1995年6月、97年7月、99年1月、数回にわたり、香港にてインタビュー実施。

(18) World Bank, *op. cit.*; East Asia Analytical Unit,（ed.), *op. cit.*; さくら総合研究所「アジア華人経済圏の現状と展望」『環太平洋ビジネス情報RIM』Vol. 2, No. 17、1992年; 野村総研香港有限公司編『香港と華人経済圏』、日本能率協会マネジメントセンター、1994年; 日中経済協会「中国の政治経済動向『華人経済圏』視察報告」1994年4月など。

(19) Forbes 資本家『94 世界華人富豪榜』、香港：三思伝播有限公司、1994年; Forbes 資本家『Forbes 華人富豪榜』、香港：三思伝播有限公司、1994年。

(20) 1997年に発生したアジア金融危機の際、インドネシアにおいて暴動が発生した。98年5月、華人が密集する地域において華人系の店舗が破壊、放火されるという事件が起こった。特に多くの華人女性がレイプされ「排華運動」ともいえる混乱状態が発生した。

(21) 田中恭子「華僑・華人」、若林正丈・谷垣真理子・田中恭子編『原典中国現代史第7巻台湾・香港・華僑・華人』、岩波書店、1995年、243−314ページ。

(22) 1999年1月、香港にてインタビュー実施。

(23) 1998年5月、カナダのバンクーバー、1999年2月、トロントにおけるフィールドワークにおいて、華人コミュニティーを訪問し、現地の中華文化センターなどで複数の方にインタビューを実施して得られた結果。

(24) Tu Wei-ming, "Cultural China: The Periphery as the Center," Tu Wei-ming（ed.), *The Living Tree: The Changing Meaning of Being Chinese Today*, Stanford: Stanford University Press, 1991, pp. 1−34.

(25) しかし、世界の華僑・華人人口の総計は中国や台湾の統計報告（『華僑経済年鑑』僑務委員会編など）によると3,600万人に及び、台湾の人口2,300万人の1.5倍に相当し、決して小さな数ではない。

(26) 一例を上げると、筆者はカナダでのフィールドワーク（1999年2月実施）において、アメリカの小さな町に住む工場技術者と話す機会を得た。彼は20年程前にギリシャからアメリカに移住し、ブルーカラー労働者として働いてきた。いわゆる知識階層ではなく、ましてや中国語や中華文化の知識はなかった。しかし、彼は技術者であるがために中国の工場で必要とされている技術を教授するため中国へ送られた。彼は現地で得た自分の経験や同地の文化（それは流行歌や飲食など、いわゆる俗なものであるが）に対する愛着を筆者に語った。このように異文化理解はさまざまな側面とレベルから実現されることが可能であり、知識階層に限られたものではなく、より開かれたものになっている。

(27) Rejeswary Ampalavanar Brown,（ed.), *Chinese Business Enterprise in Asia*, New York: Rountledge, 1995, p. 12; Wong Siu-lun, *Chinese Entrepreneurs: Shanghai Industrialists in Hong Kong*, Hong Kong: Oxford University Press, 1988.

(28) 濱下武志「移民と商業ネットワーク——潮州グループのタイの移民と本国送金」『東洋文化研究所紀要』116号、1992年3月、61−106ページ。

(29)　1995年3月、香港上環にて潮州人で中国系マレーシア人である、海産物貿易商人にインタビュー。シンガポールにおける事例については、Thomas Menkhoff, *Trade Routes, Trust and Trading Networks—Chinese Small Enterprises in Singapore*, Singapore: Verlag breitenbach Publishers, 1993, p. 152.
(30)　1999年2月22日、カナダトロントにて謝女史に対して行ったインタビュー調査。
(31)　1999年7月、ニューヨークにおけるフィールドワークにて。
(32)　1998年5月、バンクーバー、1999年2月、トロントにおけるフィールドワークにて観察。
(33)　樋泉克夫、前掲書; 朱炎、前掲書。
(34)　費孝通『郷土中国』、香港：三聯書店、1991年。
(35)　1998年9月、ニューヨークにてインタビュー。
(36)　1996年マレーシアで開かれた舜裔宗親会では、共同で不動産事業を興すことが討論された。
(37)　こうした分化現象は注目に値する。華僑・華人は「華人ネットワーク」といわれるように、一つに括られる傾向が強いが、華人社会内では老華僑、新華僑というように移民時期の差異をはじめ、出身地、経済水準などによって、異なった繋がりが形成されているのが実状である。
(38)　1997年11月、江沢民がハーバード大学を訪問した際、中国に関連のある学生団体の意見や活動は活発であった。親政府派、反政府派（民主化主張）、親台湾派、親チベット派、人権擁護団体など、それぞれのイデオロギーを主張していた。
(39)　世界華商大会の動向については、蔡林海、前掲書; 陳天璽「華商ネットワークの歴史的変遷」『アジア文化研究』4号、1997年1月、110−124ページを参照されたい。
(40)　1999年2月、トロントでフィールドワークを行っていた際、現地の華人に紹介され設立したばかりである中華文化センターを訪問。なお、横浜の華人コミュニティーにおいても、カルチャーセンター設立の計画が議論されている。
(41)　移民として出た者は、移住地において直面する苦い経験などを解消するため、宗教などに精神的に頼る傾向が見られる。なお、信者同士でアイデンティティを分かち合い、家庭で勉強会を行っている者も多い。1999年2月、トロントにて謝氏に対するインタビュー調査にて。
(42)　1998年5月、バンクーバーにてインタビュー。
(43)　藤井昇『謀略の大中華経済圏』、光文社、1994年。
(44)　荒川紘『龍の起源』、紀伊国屋書店、1996年。
(45)　1989年天安門広場においても、民主化を求める学生たちによって歌われていた。
(46)　ロッキー青木『虹をつかめ』、学習研究社、1991年。

（ちん・てんじ　日本学術振興会／東京大学総合文化研究科特別研究員）